

目的的作业課題とフロー概念に関する考察

石井良和* 石井奈智子* 林千栄子**

要 旨

本研究では、目的的作业課題がフロー経験に与える影響と Locus of Control や興味といった個人的要因の関連性を検討した。59名の対象者を交互に実施した順に目的群と無目的群に分け、目的群には被験者が選択したパーラーピース作品を完成させるという課題を行わせ、無目的群にはパーラーピースを盤の上に置く課題を行わせた。その結果、目的群においてより高いフローが経験され、各々の課題遂行後の両群にはフローと興味間に有意な相関を示し、無目的群の中の多くの被験者がそのグループの平均よりも能力水準を高く、また挑戦水準を低く認識する「不安」という感情カテゴリーに属することが示された。実際に課題を完遂させるという経験は興味とフロー経験との関係を明確にさせる可能性を示唆し、無目的課題は否定的感情をもたらす可能性を示唆した。

はじめに

喜びや生きがいのある人生を実現するモデルの一つに Csikszentmihalyi¹⁾ が提唱したフロー理論があげられる。彼は、人が生活をどう認識するかについて、一次的には外部の要因によって決定されることはあっても、自分が自分の行為を統制し、自分自身の運命を支配しているという感じを経験する時はだれにもあるとし、最良の瞬間は普通、困難ではあるが価値のある何かを達成しようとする自発的努力の過程で、身体と精神を限界にまで働かせ切っている時に生じるという。この最適経験のことをフローと呼ぶ。フローとは、内発的に動機づけられた自己の没入感覚をとまなう「楽しい」経験を指し、精神的健康を維持促進するための重要な要素として、生きがいや充実感と密接な関係を持つ。フローの初期モデルにおいて、フローは「挑戦」(行為への機会)と「能力」(行為の能力)の水準が程よく釣り合った状態で感じると定義された。そして、この挑戦が自分の能力よりも大きければ、結果として生じる緊張は不安として経験され、挑戦に対する能力の比率がより高く、しかし依然として挑戦が能力より

大きいならば、その経験は心配という感情を引き起こす。また、能力がそれをを用いる機会(挑戦)よりも大きいときには退屈状態となり、能力の挑戦に対する比率が大きすぎると退屈は次第に不安へと移行する。このようにフローモデルは挑戦と能力の関係で規定され、フロー状態以外の説明を不安、心配、退屈といった否定的感情によって表された。その後、Massimini & Carli²⁾ によって「挑戦」と「能力」の組み合わせと感情の測定結果の研究から、「覚醒」「フロー」「コントロール」「退屈」「リラックス」「無関心」「心配」「不安」という8つの感情が生じるとする8チャンネルのモデルへと発展した。現在では心理学や体育、医療などの実践的諸領域にも広く適用されてきている。

作業療法においても、フロー経験は患者に充実感を与え、生活の質を向上させる最適経験として注目されている。なかでも Kielhofner^{3), 4), 5), 6)} は、臨床実践モデルである人間作業モデル理論において、作業行動の選択や動機づけを担う意志サブシステムで一貫してフロー経験の重要性を示唆している。

一般に、目的の明確な活動においてフローがより経験されやすい傾向があるが、同様の状況や経験に対す

* 秋田大学医学部保健学科作業療法学専攻

** 財団法人信貴山病院 ハートランドしぎさん

Key Words: フロー概念

興味

目的的活動

る認識の仕方には個人差があり、フロー経験には、活動の種類のみならず個人の特性が影響すると考えられる⁷⁾。人間作業モデルではそうした個人の特性を意志サブシステムとして人間の行動を左右する要因と考えており、このサブシステムを個人的原因帰属、興味、価値から構成されるとしている。

本研究においては、状況の捉え方や動機づけに影響する個人的原因帰属の構成概念の一つである統制の所在 (Locus of Control, 以下 LOC) と特定の作業課題前後の興味を指標にして、作業課題が目的であるか否かがフロー経験にどのような影響をもたらすかを検討した。

方法

1. 対象者

本研究の趣旨を説明し、同意の得られた本学作業療法学生59名 (男性24名, 女性35名) を対象とした。対象者は交互に実施した順に目的的作业課題群26名 (以下, 目的群) と無目的的作业課題群33名 (以下, 無目的群) に分けた。

2. 課題

課題は作業療法で用いられるパーラービーズとした。目的群には2種類の作品例を提示し、被験者の好みの絵柄を選んで完成させるよう求めた。一方、無目的群

の課題は、検査者の指定した白一色のビーズを、一定時間 (目的群の平均作業時間に合わせて12分30秒)、パーラービーズ盤に挿すという単純作業とした。

3. 手続き

実験室に入室後、作業課題に関する説明を行ったのち、アンケート (鎌原ら⁸⁾による「LOC尺度」、「作業に対する興味」、「作業経験」に自己評定をさせ (付表1)、作業を開始した。目的群には、課題が完了したら検査者に声をかけるよう求め、アイロンを使用して作品を完成させた。無目的群には、行う時間を先に告げてビーズ挿しを続けることを求めた。作業は1~2名で実施し、被験者同志会話はしないなど、お互いに影響を受けないようにした。また、特に時間やビーズ個数にこだわらず、自然な状態で自分のペースで作業を行うよう指示した。作業終了後、両群に対してアンケート (小林⁹⁾による「フロー質問紙」、「作業に対する興味」の自己評定をさせ、「感想」の記入を求めた (付表2)。

4. データ解析方法

1) LOC得点

LOC尺度 (付表1) は鎌原らの一般的 LOC 尺度 (18項目からなり、各項目それぞれ4段階の選択肢から該当する段階を選択、得点範囲18点~72点、高得点ほど内的統制傾向を示す) を用いてそ

付表1 Locus of Control 評定尺度の各項目

1. あなたは、何でも、なりゆきにまかせるのが一番だと思いますか (E)
2. あなたは、努力すれば、立派な人間になれると思いますか (I)
3. あなたは、一生懸命話せば、誰にでも、わかってもらえると思いますか (I)
4. あなたは、自分の人生を、自分自身で決定していると思いますか (I)
5. あなたの人生は、運命によって決められていると思いますか (E)
6. あなたが幸福になるか不幸になるかは、偶然によって決まると思いますか (E)
7. あなたは、自分の身に起こることは自分のおかれている環境によって決定されていると思いますか (E)
8. あなたは、どんなに努力しても、友人の本当の気持ちを理解することはできないものだと思いますか (E)
9. あなたの人生は、ギャンブルのようなものだと思いますか (E)
10. あなたが将来何になるかについて考えることは、役に立つと思いますか (I)
11. あなたは、努力すれば、どんなことでも自分の力でできると思いますか (I)
12. あなたは、たいていの場合、自分自身で決断した方が良い結果を生むと思いますか (I)
13. あなたが幸福になるか不幸になるかは、あなたの努力次第だと思いますか (I)
14. あなたは、自分の一生を思い通りに生きることができると思いますか (I)
15. あなたの将来は、運やチャンスによって決まると思いますか (E)
16. あなたは、自分の身に起こることを自分の力ではどうすることもできないと思いますか (E)
17. あなたは、努力すれば誰にでも友人になれると思いますか (I)
18. あなたが努力するかどうかと、あなたが成功するかどうかとは、あまり関係がないと思いますか (E)

(鎌原・樋口・清水：教育心理学研究, 30(4), 302-307, 1982より)

(I) : 内的統制 Internal な質問項目, (E) : 外的統制 External な質問項目

クラスター1 : 1, 4, 5, 10, 12, 14, 16, 18

クラスター2 : 2, 6, 7, 9, 13, 15

クラスター3 : 3, 8, 11, 17

の合計点および3つのクラスター（以下CL）別の平均点を算出した。なお、「CL1」に属するもの（項目1・4・5・10・12・14・16・18）は、自分の人生を自分で決定している自己決定感や、自分自身で決定した方が良い結果が得られるという方略に関するもの、「CL2」に属するもの（項目2・6・7・9・13・15）は、主に環境や運の効果、及び努力の効果に関するもの、「CL3」に属するもの（項目3・8・11・17）は、努力万能主義、特に友人関係において努力する効果に関するものとされている¹⁰⁾。

2) フロー概念に関する基準

フロー質問紙（付表2）は、個人のフロー状態の程度を示す基準として、活動に参加していた時の状態や気分を問う22項目から構成されているものである。その合計を算出し（各7段階の選択肢から該当する段階を選択、得点範囲22点～154点で高得点ほどフロー状態を示す）、6つの下位項目カテゴリー（感情面、満足感、活性度、集中度、とらわれのなさ、社交性）とその他の項目の平均点を求めた。『感情面』の下位項目に属する質問は「楽しい 苦しい」「うれしい 悲しい」「愉快

な 不愉快な」「誇らしい 恥ずかしい」を問うもので、『満足感』に属するのは「うまくできた」「思い通りにできた」「充実した 空虚な」「満足な 不満足な」を問うもの、『活性度』に属するのは「強い 弱い」「積極的な 消極的な」「生き生きした 生気のない」を問うもの、『集中度』に属するのは「集中していた」「我を忘れていた」「熱中した しらけた」を問うもの、『とらわれのなさ』に属するのは「リラックスした 緊張した」「自由な 押し付けられた」「開かれた 閉ざされた」を問うもの、『社交性』に属するのは「友情ある 敵意ある」「みんなと一緒の 孤独な」を問うものである。以上のカテゴリーに属さないその他の質問は、「自分なりにやれることをやった（質問4）」「創造的な ありきたりの（質問13）」「素直な ひねくれた（質問16）」である。

また、「活動に関する難しさ」を「非常に簡単」から「非常に難しい」までの7段階で、「活動に対するあなたの技術」を「全くない」から「かなりある」までの7段階の選択肢から選択してもらい、それぞれ挑戦水準と能力水準とした。

3) 作業に対する興味の種類

作業に対する興味の種類は「まったくない」から「とてもある」までの7段階の選択肢から当てはまるものを作業課題の前後に選択してもらい、その平均点を求めた。

統計処理は、群間における有意差検定には対応のないt検定、群内の項目間の有意差検定には対応のあるt検定、フロー4分図ごとの人数比較には χ^2 検定、それぞれの関連性についてはPEARSONの相関係数を用いた。

結 果

1. LOC 得点について

目的群と無目的群は、LOC合計点において有意差はなく、両群とも平均的な値であった（目的群：48.58 ± 7.79、無目的群：50.27 ± 6.72）。また、CL別ごとの平均値にも有意差は認められなかった（表1）。

2. フロー概念について

フロー合計点において、目的群（109.00 ± 10.89点）が無目的群（97.30 ± 13.21点）より平均点が有意に高かった（ $p < 0.01$ ）。フローの下位項目カテゴリー別では、目的群の方が『感情面』（ $p < 0.01$ ）、『満足感』（ $p < 0.01$ ）、『活性度』（ $p < 0.05$ ）、『とらわれのなさ』

付表2 フロー質問紙の各項目

質問1	集中していた（集中度）
質問2	我を忘れていた（集中度）
質問3	思い通りにできた（満足感）
質問4	自分なりにやれることをやった（その他）
質問5	うまくできた（満足感）
質問6	うれしい...悲しい（感情面）
質問7	不愉快な...愉快な*（感情面）
質問8	積極的な...消極的な（活性度）
質問9	強い...弱い（活性度）
質問10	みんなと一緒の...孤独な（社交性）
質問11	誇らしい...恥ずかしい（感情面）
質問12	しらけた...熱中した*（集中度）
質問13	創造的な...ありきたりの（その他）
質問14	生き生きとした...生気のない（活性度）
質問15	閉ざされた...開かれた*（とらわれのなさ）
質問16	素直な...ひねくれた（その他）
質問17	リラックスした...緊張した（とらわれのなさ）
質問18	友情ある...敵意ある（社交性）
質問19	苦しい...楽しい*（感情面）
質問20	満足な...不満足な（満足感）
質問21	充実した...空虚な（満足感）
質問22	自由な...押し付けられた（とらわれのなさ）
活動の難しさ...挑戦水準	
活動に対するあなたの技術...能力水準	

*は逆転項目、()内は下位項目カテゴリー
各質問は7段階評価

表1 目的群と無目的群のLOCとフロー質問および興味の平均値と標準偏差

	目的的作业群 (n = 26)	無目的的作业群 (n = 33)	有意性
LOC 合計点	48.58 ± 7.79	50.27 ± 6.72	n. s
CL 1	2.78 ± 0.45	2.90 ± 0.43	n. s
CL 2	2.83 ± 0.51	2.88 ± 0.49	n. s
CL 3	2.39 ± 0.60	2.45 ± 0.63	n. s
フロー合計点	109.00 ± 10.89	97.30 ± 13.21	**
感情面	4.98 ± 0.67	4.24 ± 0.79	**
満足感	5.65 ± 0.82	4.64 ± 0.99	**
活性度	4.72 ± 0.73	4.32 ± 0.70	*
集中度	5.08 ± 0.92	4.81 ± 0.84	n. s
とらわれのなさ	4.67 ± 0.72	4.19 ± 0.88	*
社交性	3.73 ± 0.71	3.41 ± 0.68	n. s
その他 (質問4)	6.00 ± 1.02	6.12 ± 0.70	n. s
(質問13)	4.46 ± 0.90	3.85 ± 1.15	*
(質問16)	5.15 ± 0.88	5.00 ± 1.06	n. s
能力水準	4.85 ± 1.49	4.03 ± 1.26	*
挑戦水準	2.46 ± 1.21	3.61 ± 1.30	n. s
興味 (作業前)	5.31 ± 0.74	4.09 ± 1.40	**
興味 (作業後)	5.38 ± 0.98	4.52 ± 1.48	*
興味差 (後前)	0.08 ± 0.80	0.42 ± 1.32	n. s

*p < 0.05 **p < 0.01

注: 各クラスター (CL) とフロー下位項目は平均値を用いた。

($p < 0.05$) で有意に得点が高かった。その他の質問項目では質問13「創造的な ありきたりの」において目的群が有意に高得点であった ($p < 0.05$) (表1)。

能力水準において目的群 (4.85 ± 1.49) が無目的群 (4.03 ± 1.26) よりも有意に高く ($p < 0.05$)、挑戦水準において目的群 (2.46 ± 1.21) が無目的群 (3.61 ± 1.30) より有意に低い値を示した ($p < 0.01$)。なお、目的群の能力水準と挑戦水準では有意に能力水準の方が高い値 ($p < 0.01$) を示したが、無目的群では有意差は認められなかった (表1)。

その他の質問項目を除いたフロー概念の下位項目間の相関係数は表2と表3に示すとおりであった。目的群において『感情面』と『満足感』 ($r = 0.66$)、『活性度』 ($r = 0.51$)、『とらわれのなさ』 ($r = 0.53$)、『満足感』と『活性度』 ($r = 0.60$)、『とらわれのなさ』 ($r = 0.50$)、『活性度』と『とらわれのなさ』 ($r = 0.48$) に有意な相関を示した ($p < 0.05$)。同じく無目的群においても『感情面』と『満足感』 ($r = 0.61$)、『活性度』 ($r = 0.66$)、『とらわれのなさ』 ($r = 0.66$)、『満足感』と『活性度』 ($r = 0.63$)、『とらわれのなさ』 ($r = 0.49$)、『活性度』と『とらわれのなさ』 ($r = 0.45$) に有意な相関を示した ($p < 0.05$)。『集中度』において目的群は『感情面』のみに有意な相関 ($r = 0.43$, $p < 0.05$) を示したが、無目的群では『感情面』 ($r = 0.38$)、『満足感』 ($r = 0.58$)、『活性度』 ($r = 0.51$) に有意な相関を示した ($p < 0.05$)。『社交性』において目的群では

表2 目的群におけるフロー概念下位項目間の相関係数 r

	満足感	活性度	集中度	とらわれのなさ	社交性
感情面	0.66*	0.51*	0.43*	0.53*	0.06
満足感		0.60*	0.32	0.50*	-0.21
活性度			0.25	0.48*	0.01
集中度				0.06	-0.02
とらわれ					-0.04

*p < 0.05

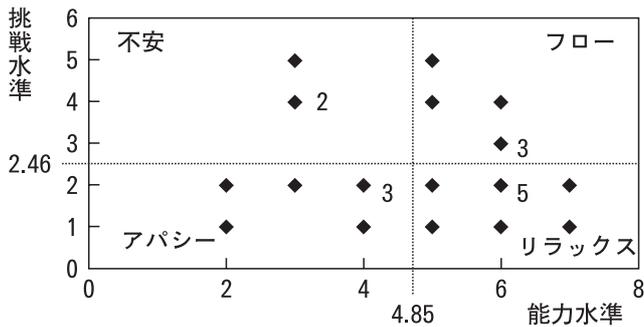
表3 無目的群におけるフロー概念下位項目間の相関係数 r

	満足感	活性度	集中度	とらわれのなさ	社交性
感情面	0.61*	0.66*	0.38*	0.66*	0.33
満足感		0.63*	0.58*	0.49*	0.38*
活性度			0.51*	0.45*	0.35*
集中度				0.26	0.20
とらわれ					0.63*

*p < 0.05

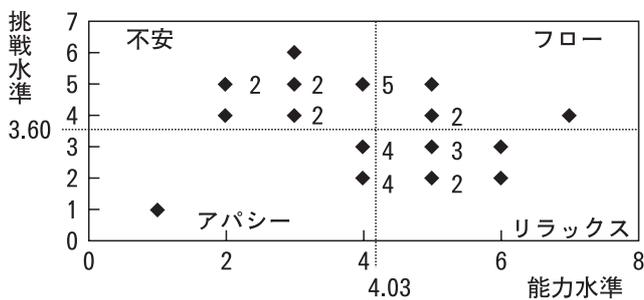
有意な相関を示したものはなかったが、無目的群では『満足感』 ($r = 0.38$)、『活性度』 ($r = 0.35$)、『とらわれのなさ』 ($r = 0.63$) に有意な相関を認めた ($p < 0.05$)。

両群の能力水準および挑戦水準各々の平均値をもとに被験者の分布を4分割したものが図1, 2である。目的群では、「不安」3名 (11.5%)、「アパシー」7名 (26.9%)、「フロー」6名 (23.1%)、「リラックス」



注) 挑戦水準2.46, 能力水準4.85は目的群の平均値, 各領域の数字は複数人数

図1 目的群の4分図における分布



注) 挑戦水準3.60, 能力水準4.03は無目的群の平均値, 各領域の数字は複数人数

図2 無目的群の4分図における分布

10名 (38.5%) であり, 無目的群では, 「不安」13名 (39.4%), 「アパシー」9名 (27.3%), 「フロー」4名 (12.1%), 「リラックス」7名 (21.2%) であった. 表4は目的群と無目的群を4つの感情別に集計したものである. χ^2 検定の結果, 人数の偏りは有意傾向であり ($\chi^2(3) = 6.693, p = 0.082$), 残差分析の結果, 「不安」が無目的群が多かった.

3. 作業に対する興味

作業前の興味は, 目的群で有意に高く (目的群: 5.31 ± 0.74 , 無目的群: $4.09 \pm 1.40, p < 0.01$), 作業後の興味も目的群が有意に高かった (目的群: 5.38 ± 0.98 , 無目的群: $4.52 \pm 1.48, p < 0.05$). 作業前後の興味スコアの差 (作業後 - 作業前) には両群間に有意差は認められなかった (目的群: 0.08 ± 0.80 , 無目的群: $0.42 \pm 1.32, p > 0.05$) (表1).

4. フローとLOC, 興味, 能力および挑戦水準

目的群においてフロー合計とLOC, 興味, 能力および挑戦水準との間に有意な相関が見られたのは, 作業後の興味 ($r = 0.56, p < 0.05$) のみであった (表5).

無目的群ではフロー合計との有意な相関を示したのは, CL2 ($r = -0.38, p < 0.05$), 作業前の興味 ($r = 0.60, p < 0.05$), 作業後の興味 ($r = 0.69, p < 0.05$), 能力水準 ($r = 0.43, p < 0.05$) であった (表6).

表4 目的群と無目的群におけるフロー4分図ごとの人数

	不安	アパシー	フロー	リラックス	計
目的群 (%)	3 (11.5)	7 (26.9)	6 (23.1)	10 (38.5)	26 (100)
期待度数	7.051	7.051	4.407	7.492	
調整済み残差	-2.389*	-0.029	1.114	1.452	
無目的群 (%)	13 (39.4)	9 (27.3)	4 (12.1)	7 (21.2)	33 (100)
期待度数	8.949	8.949	5.593	9.508	
調整済み残差	2.389*	0.029	-1.114	-1.452	
計	16	16	10	17	59

* $p < 0.05$

表5 目的群のフロー合計とLOC, 興味 (前・後), 能力, 挑戦の相関係数 r

	CL 1	CL 2	CL 3	興味 (前)	興味 (後)	能力	挑戦	フロー合計
LOC 合計	0.89*	0.85*	0.83*	0.52*	0.30	-0.11	0.05	0.10
CL 1		0.60*	0.62*	0.45*	0.24	0.07	-0.13	0.03
CL 2			0.59*	0.50*	0.34	-0.21	0.24	0.19
CL 3				0.37	0.19	-0.19	0.04	0.06
興味 (前)					0.60*	-0.28	0.10	0.28
興味 (後)						0.12	-0.02	0.56*
能力							-0.14	-0.00
挑戦								-0.16

* $p < 0.05$

表6 無目的群のフロー合計とLOC, 興味(前・後), 能力, 挑戦の相関係数r

	CL 1	CL 2	CL 3	興味(前)	興味(後)	能力	挑戦	フロー合計
LOC 合計	0.84*	0.78*	0.61*	- 0.11	- 0.27	0.14	- 0.15	- 0.21
CL 1		0.52*	0.26	- 0.06	- 0.10	0.10	- 0.30	- 0.07
CL 2			0.21	- 0.26	- 0.25	0.09	- 0.07	- 0.38*
CL 3				0.10	- 0.27	0.14	0.08	- 0.01
興味(前)					0.58*	0.28	- 0.41*	0.60*
興味(後)						0.36*	- 0.13	0.69*
能力							- 0.20	0.43*
挑戦								- 0.19

*p < 0.05

5. 結果のまとめ

以上の結果をフロー概念に関連して要約すると、行動に影響すると考えられる統制感(LOC)では有意差のない目的群と無目的群において、目的群の方がより多くのフロー構成概念で有意に高得点であり、作業前後の興味も有意に高かった。目的群においてフロー合計と有意な相関が見られたのは作業後の興味のみであったが、無目的群では作業前・後、CL 2、能力水準とに有意な相関があった。目的群の能力水準は有意に高く、挑戦水準は有意に低く、無目的群で「不安」という感情カテゴリーが多く見られた。

考 察

1. フロー概念と興味

パーラービーズを並べて自ら選択した絵柄を完成させるという目的をもった活動と、作業工程は類似しているものの、そうした目的をもたない活動を実施して、フロー概念と興味を比較した。

目的群の方が作業前・後ともに高い興味を示したが、作業前の興味に関しては、目的群には作品例を提示しているので厳密には同じ条件ではなかった。臨床的には漠然と興味を尋ねるよりは見本を示すことから作業療法を導入することが多いが、目的が明確になることによって興味も増すと考えられる。作業後の興味は、実際に経験してみてもからの楽しさについての自己認識といえるが、両群ともに有意な変化は示さなかった。目的群においては低い挑戦水準で完成したことが考えられる。また、無目的群の挑戦は目的群よりも有意に高い水準であり、作業前の興味と有意な負の相関があったが、そうした挑戦感が有意な興味の増加には至らなかった。これは要求された挑戦水準が実際にそれほど高いものと感じられなかったことが一因と考えられる。

フロー概念に関しては、目的群の方がフロー合計とその下位項目である『感情面』、『満足感』、『活性度』、『とらわれのなさ』で有意に高得点であったが、『集中

度』、『社交性』では有意差は認められなかった。また、『感情面』、『満足感』、『活性度』、『とらわれのなさ』の各下位項目間は両群ともに有意な相関を示していた。パーラービーズ課題はできるだけ類似した作業工程で、目的感が異なるものという基準で決定されたものであり、最終的に小さな突起にビーズを刺すことの反復という両群ともに要求される工程で、かつ活動そのものが単独で行われるという統制の影響と考えられる。しかし、無目的群における『集中度』と『社交性』は他の下位項目と有意な相関を多く示していた。このことは無目的群の感想の中に「作業しやすい方法を工夫して行った」、「作業の目的は何か考えながら行った」、「自分なりの具体的な目標を立ててがんばろうと思った」というコメントにあるように、単純に楽しいから行うという動機付けだけではなく、幅広い動機付けを工夫して発揮している可能性が考えられた。

目的群においてフロー合計と有意な相関が見られたのは作業後の興味のみであったが、無目的群では作業前・後、CL 2、能力水準とに有意な相関があった。無目的群においてCL 2と能力水準にそれぞれ有意な負と正の相関を示したことは、目的が明確でない場合にCL 2の特徴である「努力の効果」が報われないことや、能力を工夫することによって前述のような幅広い動機付けを発揮している可能性が考えられる。興味とフロー概念については、今回用いたフロー質問紙にも楽しさを質問する項目があるように、フロー概念は「楽しさ」に関連する感覚であるので、どちらの群においてもフロー概念と興味には相関関係があると予想されたが、両群に共通したのは実際には作業を遂行するという経験の後であった。作業療法では遂行または実行(performance)や為すこと(doing)ということが不可欠であるが、この結果は改めてその重要性を示したものと考えられる。興味については、山田¹¹⁾がMatsutsuyuの興味チェックリスト¹²⁾を我が国に紹介して以来、日本の作業療法でも研究テーマとして取り上げられるようになったが、興味が地域文化の影響を

受けて形成されることから当然すべての興味をチェックリストに網羅することは不可能であり、また、作成された興味チェックリストを因子分析しても明確に分類することはできていない¹³⁾。興味チェックリストは作業療法導入時にクライアントの興味ある活動を知る目的で利用されることが多い。本研究の結果からは実際に行ったことのある活動かどうかという経験の有無をあわせて評価する方がより動機づけに関連した有意義なアプローチになるものと思われる。

2. 能力・挑戦水準と感情カテゴリー

能力水準と挑戦水準は両群ともに課題の終了後（目的群では作品の完成後）に記載してもらったものである。両群ともに自分の能力が挑戦水準を上回ると感じる傾向があったが、目的群では有意差を示した。目的のある作業の達成経験が、能力水準の認識を上げ、挑戦水準の認識を下げるという方向に影響するとすれば、同様の活動に対してより挑戦を求める可能性が考えられる。この反復は技能の向上につながるため、作業療法における原動力として達成ということが重視されている¹⁴⁾ものと思われる。

フロー研究において、経験は挑戦と能力の水準により規定される。浅川¹⁵⁾は、経験を4状態（不安、アパシー、フロー、リラックス）に分類する方法を用い、挑戦と能力水準が群の平均よりも高い状態をフロー状態としている。今回、この方法でフロー状態に分類されたのは、目的群では6名、無目的群では4名であった。理論上、フロー状態にある場合、フロー合計点において高得点であること、4分類でフロー状態に分類されることが期待されたが、実際には両者が対応していない例もあった。そこで同じ方法で両群の対象者を4状態の感情カテゴリーに当てはめたものが表2に示されているものであった。 χ^2 検定の結果、有意傾向であったので残差分析を行い、「不安」が無目的群で多いとしたが、無目的群の能力水準の平均値が4.03と不安やアパシーに分類した境界点（4点）に人数が集中していたので、もう少しサンプル数を増やした方が確実かと思われる。無目的群では12分30秒間という時間的見通しを条件として示していたが、もしこの条件がなければもう少し多くの被験者が「不安」に分類された可能性が考えられる。Fisher¹⁶⁾は作業療法で用いられる活動群を訓練（exercise）、人工的作业（contrived occupation）、治療的作業（therapeutic occupation）、適応的または代償的作業（adaptive or compensatory occupation）に分けて、後の2つの作業をクライアント中心としている。区別をする観点

あるいはクライアントのものかという点である。今回の実験に当てはめると、無目的群の活動は訓練に相当し、目的群の活動は治療的作業群に相当する。セラピストにとって意味と目的のある訓練は実際に臨床では多く見かけられる。治療上の意味はあるものの、クライアントの「不安」に配慮した工夫が必要であることを示唆している可能性が考えられる。

まとめ

本研究では、目的的作业課題がフロー経験に与える影響とLOC、興味との関連性を検討した。その結果、目的のある作業活動において、より高いフローが経験され、実際に作業を遂行する経験は、目的群と無目的群の作業後の興味とフロー経験との関係を明確にさせる作用の可能性を示した。また、そうした遂行に伴う経験は目的群において、課題の挑戦水準を低く認識させる傾向がみられた。無目的群では、時間的見通しを示した条件であったが、能力水準を低く認識し、挑戦水準を高く認識する「不安」という感情カテゴリーに分布する被験者が多く見られた。

文 献

- 1) Csikszentmihalyi, M (今村浩明・訳) : フロー体験喜びの現象学. 世界思想社, 1996.
- 2) Massimini, F & Carli, M : The systematic assessment of flow in daily experience, In M. Csikszentmihalyi & I. S. Csikszentmihalyi (Eds), Optimal experience. Cambridge University Press, 266-287. 1988.
- 3) Kielhofner, G 編著 (山田 孝・監訳) : 人間作業モデル 理論と応用. 協同医書出版, 1990.
- 4) Kielhofner, G 編著 (山田 孝・監訳) : 人間作業モデル改訂第2版 理論と応用. 協同医書出版, 1999.
- 5) Kielhofner, G 編著 (山田 孝・監訳) : 人間作業モデル改訂第3版 理論と応用. 協同医書出版, 2007.
- 6) Kielhofner, G : Model of Human Occupation-Fourth Edition : Theory and Application. Lippincott Williams & Wilkins, 2007.
- 7) 清水明子 : 調査用紙を用いたデイケアプログラムの検討～フロー経験の視点から～. 精神医学研究所業績集 33号 : 175-185, 1996.
- 8) 鎌原雅彦, 樋口一辰, 清水直治 : Locus of Control 尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討. 教育心理学研究, 30 : 302-307, 1982.
- 9) 小林隆司 : Fm によるフロー質問紙の妥当性の検討.

- 作業行動研究, 7(1) : 73-74, 2003.
- 10) 鎌原雅彦, 樋口一辰 : Locus of Control の年齢的变化に関する研究. 教育心理学研究, 35 : 177-183, 1987.
- 11) 山田 孝 : NPI (Neuropsychiatric Institute) 興味チェックリスト ~ 理論的背景と評価法の説明 ~ . 理学療法と作業療法, 16(6) : 391-397, 1982.
- 12) Matsutsuyu J, S.: The interest check list. American Journal of Occupational Therapy 23(4) : 323-328, 1969.
- 13) Klyczek JP, Bauer-Yox N, Fiedler RC: The Interest Checklist: A Factor Analysis. American Journal of Occupational Therapy 51(10), 815-823, 1997.
- 14) Matsutsuyu J, S.: Occupational Behavior Approach, Willard and Spackman's Occupational Therapy, 6th. edition, Chapter 8, p.129-134, J. B. Lippincott, 1983.
- 15) 浅川希洋志 : フロー経験と日常生活における充実感. 今村, 浅川・編, フロー理論の展開, 世界思想社, 2003, pp.177-213.
- 16) Fisher, A. G. : Uniting practice and theory in an occupational framework. 1998 Eleanor Clarke Slagle Lecture. American Journal of Occupational Therapy 52(7), 509-521, 1998.

A study of effects of a purposeful task and flow concept

Yoshikazu ISHII* Nachiko ISHII* Chieko HAYASHI**

* Course of Occupational Therapy, School of Health Sciences, Akita University

** Heartland Shigisan, Shigisan Hospital Group

The aim of this study was to investigate the effects of a purposeful task and personal factors (interest and locus of control) on the flow experience. Subjects (n=59) were interchangeably divided into purposeful (n=26) and non-purposeful group (n=33). The purposeful group performed a task involving completing a perler beads design selected by the group, and the non-purposeful group performed a task involving putting perler beads on a board within a set time period. The results showed that a higher flow was experienced in the purposeful group in comparison with the non-purposeful group, that there was a significant correlation between flow and interest in each task after it was carried out, and that many subjects in the non-purposeful group demonstrated an emotional category of anxiety due to a lower level of ability and an upper level of challenge than the average of this group. It is possible that the experience of actually accomplishing a task defines the relationship between interest and flow experience, and the experience of a non-purposeful task causes negative feeling.